先生は，なかなか趣味の広い方で，金沢大学勤務当時は落語研究会の顧問をなさいましたが，ご自分でも山遊亭銭朝の名で，植物関係のパーテイの折などに，落語をご披露されました．また，料理もお得意で，学生時代には木曾坂の職員寮に結婚前の先生をお訪ねして，手作りのおでんなどをご馳走になったこともありました．これは，暖簾をかけた部屋で模擬店を設え，釜で煮るという本格的なものなので，田舎育ちの私などはびっくりしたものです．コレクションも先生のご趣味で多岐にわたりますが，帽子などの紋章，ぐいのみ，矢立などはかなり集めておられたと思います．

先生と私の関係は，見方によっては少し特別なものかもしれません．直接の師弟関係ということになりますと，正宗厳敬先生になりますが，1953年に創設されたばかりの金沢大学に入学（当時はまず教養部理科Ⅰ類に所属）して，すぐ，紹介されたのが少し前に赴任された里見信生先生でした．シニアに進級した当時は，教授の講義には助手の先生が同伴されるのが慣わしでした．植物第一講座の学生は少なく，私ともう一人の二人だったものですから，その同級生が欠席すると，教官が二人に学生は私が一人の割合になり，なんとも気まずい雰囲気となるのでした．里見先生が困惑しておられた様子が懐かしく思い出されます．それ以来，標本貼りの仕方からはじまって，近年はあまり多くの審議会の委員などを兼任してはならない理由にいたるまで，いろいろ，具体的なお教えを頂きました．これも私が若い頃，ちょうど，先生が講師になられた時期に，少しの間でしたが正宗厳敬教授のご好意で助手として勤めたり，その後も勤務先が理学部の近くだったこともあって，本当に親しくさせていただきました．教室や雑誌関係のことで重要な問題があると，意見をお聞きになることもありました．

いま，先生は徳島市の古刹，丈六寺にある先祖伝来のお墓に静かに眠っておられます．心からご冥福をお祈りいたします．

（古池　博）

新　刊

□安藤敏夫，小笠原亮（監），森　弦一（編）：**日本花名鑑 2**　386 pp. 2002. ￥2,980. 日本花名鑑刊行会.

先に紹介したものの第2号である．2000年の市場流通品の中から第1号と重複しない約400種類を収容した．本書のグループ分けは市場での取扱いに合わせてあるが，前号とはその順序が変わり，掲載種類数の少ないグループを先に示してある．本号では前回手をつけられなかったランが，一つのグループとして加わった．ただしオリジンの探索が大変なようで，店頭で見覚えのある花が「詳細調査中」として属名だけ示されている種類もある．前号で問題になったカラー写真の不鮮明は，図の数をへらしてサイズを大きくした結果かなり改善されているが，ものによっていま一息というのもある．索引は1，2号合わせて作られていて便利だが，これは先行き無理になるので，一工夫せねばなるまい．新しい試みなのでいろいろ手直しが必要だろうが，創意工夫で切り抜けてもらいたいものだ．

（金井弘夫）

□Watanabe T., Takano A., Bista M.S. & Saiju H.K. (eds.): **Proceedings of Nepal-Japan Joint Symposium on Conservation and Utilization of Himalayan Medicinal Reseources** 368 pp. 2002. Society for the Conservation and Development of Himalayan Medicinal Resources.

2000年11月にカトマンズで行われたヒマラヤ地域薬物資源の保護と利用に関するシンポジウムのまとめである．参加者約200名，その内日本からは36名，ネパール以外の国から5名が出席し，60件を超えるさまざまな発表が記録されている．シンポジウムの結論としては，ヒマラヤの薬用資源利用の活性化と民生への応用のために，inventory 作りの必要性が述べられ，そのために Department of

Plant Resources が中心となった調査・開発・人材育成などに対する援助・協力が要望されている．差し当たりの資源開発の目標として挙げられている薬物を見ると *Nardostachys*, *Valeriana*, *Ephedra* で昔ながらの感じがし，こういう分野でも新しいものを見つけるのはなかなかむづかしいのだな，と思う．入手希望者はヒマラヤ地域天然薬物資源研究会（194–8543 町田市東玉川学園 3–3165 昭和薬科大学植物園 Tel. 042–721–1585）へ．

（金井弘夫）

□Pearce N.R. and Cribb P.J.: **The Orchids of Bhutan** 643 pp. 2002. ￥17,690. Royal Botanic Garden Edinburgh.

Flora of Bhutan の Vol. 3, Part 3 に当たるが，B5 版と既刊のものよりはサイズがずっと大きく，その理由が序文に記されている．ラン科はこの地域最大の種数を持ち，これ迄の本のサイズでは入りきらないこと，本書がこのシリーズの掉尾をなすものであることなどから，大型にして分布範囲の記述を国外まで拡げ，学名の引用をよりくわしくし，タイプや参照標本をすべて記すなど，既刊のものより内容を拡張した．とくに隣接のシッキムの標本は丹念に引用されている．参照した標本のリストが巻末18頁にわたって示され，東大の採集標本も含まれている．これによって本書はブータンのみならず，ネパールやインドや中国のラン研究に，より有用さを加えることとなった．138枚の線画と32頁のカラー写真を含む．全部で579種が記録されているが，内17 % は一点しか記録されておらず，2–3 点しか標本がないものまで含めると50 % に近い．したがって本書がブータンのランの総まとめというものではなく，研究の余地は大いにあることが強調されている．（金井弘夫）

□Rajbhandari K.R. and Bahttarai S.: **Beautiful Orchids of Nepal** 220 pp. 2001. Rs. 1,200. Private Publication.

ネパール産ラン科植物101種を，カラー写真を左頁に，解説を右頁に配してある．カラー写真はすべて一頁大で，拡大し過ぎの感じのものもあるが，カトマンズで印刷されたものとしては，こう言っては失礼だが上出来で，その出来ばえは原画の質にかかっていると言ってよい．書名からわかるように，目につく種類を対象にしているので，これから先は植物学的な図譜を目指してほしいものだ．そのとき大事なのはスケッチだが，ネパールの植物図はどうも立体感にとぼしいうらみがある．研究者が自分で描くにせよ画工に描かせるにせよ，この点を意識することが必要だろう．入手についての著者の連絡先は Department of Plant Resources, Thapathali, Kathmandu である．

（金井弘夫）

□清水建美，木原　均（写真）：**高山に咲く花** 495 pp. 2002. ￥3,000. 山と渓谷社.

高山帯の植物をその場で調べることができるよう，ハンディサイズになっている．属ごとにその花式が掲げられ，その読み方が巻頭に説明されているが，これはどこ迄理解されるだろうか．私などは花式図の方が具体的で分かりやすいと思うのだが，具体的なだけに一つの図で代表できないという問題がある．また染色体数もわかっているものは種類ごとに記されている．葉緑体 DNA の研究による分子系統地理学についても，分類学へのこの手法の導入についての著者の取り組みが解説されている．著者が一般向けの図鑑から，さらに高度な内容をもつものにしようとする意図が察せられる．

（金井弘夫）

□森　和男：**雲南の植物** 239 pp. 2002. ￥10,000. トンボ出版.

植物自由業を自称する著者は，最近では専ら中国の四川，雲南を駆け回って観察や撮影を続けている．本書はその蓄積の一部を披露したもので，1,000点を超える美しいカラー写真で埋められている．写真の出来ばえについては，あらためて言うまでもあるまい．この地域は国の観光政策もあって，外国人への開放が進んでおり，道路網も発達していて，車を使えば高山草原へ直接乗り入れることも可能だそうだ．もっもと，二度と通りたくないというような道も少なくないらしいが…その一方，山草の商品価値に目覚めた人々によって，目ぼしい花々が忽ち姿を消すということ